


朝日 俳壇

第40回 朝日俳壇賞

2023年の入選句から4人の選者が1句ずつ選びました。受賞者に賞状と記念品が贈られます。朝日歌壇賞は来週掲載します。

大串章 選

連凧の伸びゆく先に未来あり
(下関市) 野崎 薫




関門海峡に春を告げる
凧揚げ大会。子供たち手
作りの凧も舞うが、この
句は大人たちが揚げた河
豚の連凧を見て、子供たち
の願いを込めて作った。常々、明るく楽
しい句を作ろうと心がけている。

〈評〉「連凧」の先には、どんな未来があるのか。大空は限りなく広い。

高山れおな 選

鬼やんまわが持たぬものすべてもつ
(佐渡市) 千 草子




……空からの来訪。華麗な衣装。鋭い眼光。短い滞空。滞在時間内での世界の新たな裁断。ゆきわたるキラメキ。たちまち知られざる彼方への投身。振り返らないその影。……一すじ連なる希望の裂開。

〈評〉鬼やんまへの讃嘆の裏に、諦観や自持などさまざまな感情が籠る文高い句。

小林貴子 選

水差せば金魚は裳裾揺げけり
(奈良市) 田村 英一




人々は連綿と金魚と共に生し、庶民文化となる。金魚は仕種が多様で、感情表現も豊か。愛すべき仲間である。句作の際は、句材を擬人化して詠みたいと思っている。今回の金魚は、天平時代の女性というイメージだった。

〈評〉水の動きと、それに応える金魚の動きが、夢見るように美しく描かれた。

長谷川權 選

八月を真二つにして黙禱す
(吹田市) 太田 昭



八歳のときに対米英戦争が始まり、十二歳で敗戦の痛みを知った。日本の昭和は、まさにこのとき真二つにされた。開戦の罪は今でも忘れられることは無く、国のために散った若者たちへの黙禱を忘れることもない。

〈評〉「八月を真二つ」とは、じつに印象鮮明。昭和史を一言で描いた。

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メディアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿は無地のほか1枚に1作品、未発表の自作のみ。作品の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 請海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削する場合があります。

- ◆ 小林貴子 選
- 奈良県はタツノオトシゴ年新た
(奈良県斑鳩町) 若林 明良
食卓に骨の賑はふ聖夜かな
(浜松市) 小澤あり須
白鳥の羽ばたきはんば夢はんば
(仙台市) 三井 英二
メリークリスマス言ったことない七十二歳
(東京都府中市) 矢島 博
問はるるは問ふ方らし初日記
(富士市) 村松 敦視
デコピンに微笑みのわく冬うらり
(日高市) 岩野 春江
雪がごとみな楽しくて雪明り
(鹿角市) 北村 孝子
煤逃げの類集ひけり理髪店
(さいたま市) 大慈彌英二
手袋を脱ぎて脱帽して握手
(京大津市) 多田羅初美
テレビより冬夜の教へ「死を想へ」
(藤沢市) 朝広三猫子

【評】一句目は長年の新年詠。竜は想像上の動物なのに、タツノオトシゴが現存するのが私は不思議で仕方ない。二句目、鶏のもも肉を美味しく頂き、残る骨。三句目、ちょっと羽ばたいて、また静まる。四句目、これからは毎年言いましょ。

- ◆ 長谷川權 選
- 象の名は花子と言へり開戦日
(富士宮市) 渡邊 春生
風花のひとつひら風をかけたのぼる
(高山市) 直井 照男
うそ寒や唇動きさやうなら
(西海市) 前田 一草
綿虫のひとりぼつちに綿虫来
(川口市) 青柳 悠
良き事のあれば好き音落葉踏む
(今治市) 横田青天子
この縁にかつては母と日向ぼこ
(狭山市) 宮倉 浅子
冬ともし針一本のかけぼふし
(彦根市) 阿知波裕子
第九響く共鳴体の地球かな
(松本市) 松井 武石
人類の末期の如き年の暮
(筑紫野市) 二宮 正博
軽やかな目覚め五体に干蒲団
(佐倉市) 松平 武史

【評】一席。花子は戦時中、上野動物園で毒入りの餌を拒んで餓死した象。開戦さえないければ。二席。何を思ったか、一片の風花。三席。「唇動き」は出色。上五、芭蕉の「唇寒し」があるので再考を。十句目。今年こそこうありたい。

- ◆ 大串章 選
- 極楽も地獄も忘れ日向ぼこ
(長崎市) 下道 信雄
電子音続改札息白し
(東京都板橋区) 竹内宗一郎
毎日が戦火のニュース年暮るる
(前橋市) 萩原 葉月
出征の駅は無人や開戦日
(太田市) 吉部 修一
被爆樹の癒えぬ哀しみ虎落笹
(長崎市) 佐々木光博
路地裏の居酒屋で呑むサンタかな
(千葉市) 石野 勤
放牧の牛を帰して山眠る
(神戸市) 末永 拓男
冬耕機カーブ巧みに過ぎ行けり
(ドイツ) ハルトツーク洋子
古民家の一日体脱落葉掃き
(鎌倉市) 小椋 昭夫
がん病棟試し歩きの冬帽子
(立川市) 笹間 茂

【評】第1句。無念無想の無我の境地、心身ともに温まる。第2句。冬の通勤時間帯、自動改札機にICカードを次々タッチして通る。第3句。ロシアとウクライナ、イスラエルとパレスチナ、「戦火のニュース」が途絶えぬまま昨年が終わった。

- ◆ 高山れおな 選
- をちこちに狐火浮かぶ開戦日
(長崎県波佐見町) 川辺 酸模
くるくるくるきたきたきたきた大噓
(佐倉市) 葛西 茂美
古きもの炎にかへし焚火かな
(南足柄市) 海野 優
横須賀にロナルド・レーガン聖夜の灯
(川崎市) 神村 謙二
寒林は大き鳥籠朝日差す
(北本市) 萩原 行博
白鳥の誘致議決す村議会
(横浜市) 我妻 幸男
初場所や髪に稲穂の若者衆
(さいたま市) 田中つかさ
枯菊を五右衛門風呂の種火とす
(東京都中野区) 庄司 敏文
らつきようを咲かせて島に漁師老ゆ
(松山市) 杉山 望
湯豆腐のくつれ独りといふ実感
(春日部市) 斉藤とし彦

【評】川辺さん。中国と戦争しつつ米英と開戦。狐に憑かれてでもいたように。葛西さん。六・六・五で十七音。海野さん。「炎にかへし」がしみじみ。十席。久保田万太郎の〈湯豆腐やいのちのはてのうすあかり〉と同じ気分をうんと素材に。